

書籍名：本能寺の変 431 年目の真実

著者：明智憲三郎

四部構成

第一部 作り上げられた定説

第二部 謀反を決意した真の動機

第三部 解明された謀反の全貌

第四部 叶わなかった二つの悲願

この本の主題になっている「本能寺の変」(1582 年)については歴史学会ではおおむね公認されている「定説」というものが既にある。

また、著者と同様に奇想天外とも思える「異説」を唱える学者も少なからず存在する。

しかし著者、明智憲三郎氏は光秀の子孫として、この歴史の定説や異説に対し、膨大な資料から徹底して証拠を洗い直し、根底から「本能寺の変」研究をやり直した。

著者はこの手法を「歴史研究」ではなく「歴史捜査」と呼んでいる。

著名な歴史学者すら思い込みという罠から、見落としてしまうような小さな証拠を積み重ね、従来の定説とは異なる答えを導き出していく。

さらに自身の出した答えに対しても、別の答えの可能性が無いか、納得いくまで再検証を行なっていくところは、まさに熟練刑事の執念の捜査というべき内容だった。

日々の生活や業務の中でも、先人の導き出した答えにとらわれすぎて、そこで思考がストップしてしまうことが多々ある。

しかしそこで思考を止めてしまうのではなく、自由な発想と、客観的に証拠を探す執念で、新しい答えを導き出していく著者の研究(捜査?)姿勢はすばらしかった。

日頃から思考が固まっていまいがちな私にとっても、今後の「ものの考え方」に大きな影響を与える一冊だった。